

第2回「森の京都推進会議」結果概要

1 日時：平成26年12月8日（月） 14時30分～16時40分

2 場所：京都府綾部総合庁舎 2階 第1会議室

3 出席者：別添の通り

4 概要

(1) あいさつ（岡西副知事）

- ・ 「森の京都」では、以前からお話ししている通り、地域の良さを地域の人達自身がまず再認識して、その良さを外の人達にも発信していくことが重要。また、それを金銭的価値に変えて、子ども達がこの地域で暮らしていくことのできる環境を整えることが大切。
- ・ 観光地づくりではなく地域づくり。このメンバー間では、そのあたりの認識の共有ができてきているので嬉しく感じている。本日も忌憚のない御意見をいただきたい。

(2) 「森の京都構想」（中間案）の説明（事務局）

(3) 「森の京都」実現に向けた各地域での取組等（→は岡西副知事・本田企画理事のコメント）

■亀岡市

- ・ 亀岡市内には、京都縦貫自動車道のインターが4カ所あるが、通過点になってしまっは駄目。大都市圏からもっと来てもらえるよう、インターで途中下車しても、料金が通算される仕組みができれば、下車をして、名産品等を購入してもらえ。
- ・ 亀岡は真ん中に盆地があり、周囲に森林があるが、人が山に入らないので、松等も枯れてしまっている。そうした中で、民間企業等がモデルフォレスト運動で植林等の活動をしてきている。
- ・ 大都市圏に近いという強みを活かし、亀岡が中心となって、周囲の市町とも連携して、交流人口を拡大していきたい。

■南丹市

- ・ 美山では、「森の京都」について、府・南丹市・美山町の3段階で検討を進めている。11月10日に森の京都美山推進会議を発足し、12月4日にはその役員会議も開催した。
- ・ 平成27年の国定公園指定、「森の京都」事業スタート等により、美山の96%を占める森や由良川を活かした取組がいよいよできる、と考えている。
- ・ 具体的には13の事業を考えている。①木質バイオなど自然エネルギーの研究・開発・実用化、②国定公園化を視野に入れた地元産木材を活用したビジターセンター開設等、③木育の実践、④食育・獣害駆除、⑤エコロッジの建設、⑥自転車、マラソン等森を活かしたスポーツ観光、⑦青空バス・トロッコ整備、⑧宿泊施設の整備、⑨オール美山の各集落で訪問者に楽しんでもらい文化を伝承できるミュージアム、⑩掛け流し水族館・親水公園など川を活かした取組、⑪道の駅・美山ふれあい広場を、安全で十分なサービス提供ができる道の駅に再整備、⑫人材育成・先進地視察、⑬体験交流プログラム開発。
- ・ 今は夢かもしれないが少しでも可能性のあるものを全てあげた。このプログラムについて、これから森の京都美山推進会議で、核となる観光資源をどう配置して、どうつなげるか、必要施設の具体的な事業内容、全部できるわけではないので優先順位の検討、最終的には事業計画の作成、等を進めていく。
- ・ 「森の京都」の取組については、「美山まちづくりかわら版」にも掲載し、全戸配布して、住民にもPRしている。
- ・ 12月14日に第9回美山フォーラムを開催する。パネルディスカッションのテーマは

「活かせ、森林（もり）の力」で、美山町のキーパーソンから話をしてもらおう。

- ・ 「南丹市美山エコツーリズム推進全体構想」が11月21日に環境省に認定された。

→ 元気のでる内容を考えていただいた。全部はできないかもしれないが、美山のように、まずは、アイデアを出して、優先順位を付けていけばよい。その上で、発信の方法等は、じゃらん等の専門家と連携して検討・実施していきたい。

■京丹波町

- ・ 食をテーマにしたまちづくりを進めていきたい。今年も10月26日には「京丹波食の祭典」を開催し、1万2千人以上の参加者があった。
- ・ 京都縦貫自動車道全線開通にあわせて、京丹波の大きな拠点となる4番目の道の駅「味夢の里」がオープンする。ここを拠点として、その効果を町内に波及させたい。
- ・ 周囲には大きな集客ができる丹波自然運動公園、日本三大農牧学校である須知高校の学校林であるウィードの森など、自然に親しめる施設がいろいろある。丹波自然運動公園では、昨日、熱気球のイベントを開催し、空からふるさとを眺めてもらった。ウィードの森については、ガイドをつけて、付加価値を高めていきたい。
- ・ 周辺地域には、グリーンランドみずほ、わち山野草の森等の施設もある。また、和知には、道の駅の近くに、河岸段丘でできた珍しい集落もある。
- ・ しかし、こうした資源をお金に換えていくことがまだまだできていない。どう付加価値をつけてお金に換えていくかが大きな課題。
- ・ 府立林業大学校もあるので、木質資源の実験・検証もやっていきたい。
- ・ プランの事業化については、優先順位をつけながら取り組みたい。12月19日に京丹波町内でのワーキングを開催して検討をする予定をしている。
- ・ 熱気球については、今回は町内の小学生100名＋一般50名に参加してもらった。熱気球は気温や風によって上げられる時が限られるので、朝と夕暮れの2時間、小学生等上空20メートルまで上がってもらった。同時に、地球儀の形をした気球をあげて、それを見てもらった。琵琶湖であげている例はあるが、京都ではここだけ。京都は、日本初の有人熱気球の初飛行に成功したのが京大等の学生であるなど、気球と縁の深い土地。今回初めて実施したが、来年夏に2回目のイベントを企画したい。財源は今回は、子どもゆめ基金等を活用した。

→ 熱気球については、公共頼みだと続かないので、継続性のある形で実施することが必要。和知について、あれだけの河岸段丘があるところは他にはないので、うまく事業化を。

■福知山市

- ・ 大江山では自然と伝説を活かして、観光客も増えている。受入施設として、大江山の家グリーンロッジもあるが、冬は残念ながら雪に埋もれてしまう。冬場をどうするかが課題。
- ・ 経済効果を生む土産物や観光業ももともとないので、急に大勢の人が来ることは想定していない。リピーターや、「半農半X」の定住者等を確保していきたいと考えている。この地域に来たい、と言っておられる方はあるので、その人達が暮らせるように、「半X」の部分を増やしていくことが課題。他地域から入って来やすいように、光ファイバー等のIT環境を整えておくことも必要。
- ・ 木材や植物の基礎的知識がないので、大学と連携して、そうしたことも勉強したい。
- ・ 20年前、一旦人口減少が止まった時代があったが、今は、また毎年のように洪水被害等もあり、高齢者は諦めムードで、若者は他地域に出て行ってしまいう状況。そうした人達をもう一度引っ張り込みたい。このため、来年3月29日には、元伊勢での参道マルシェを企画するなどの取組も行っているところ。
- ・ 外国語のパンフレット、土産物づくり等も行っている。外国語のできる職員を大江観光(株)で雇用したり、フランス料理のできる人を置いたりしている。
- ・ 天橋立にはマレーシアやインドネシアの観光客が来ている。そういう人達を取り込むた

めには、ムスリム観光客に対応した食事が必要だが、各施設で対応するのは困難なので、まとめてつくって配給できるような施設を府の方でつけれないか。

- ・ 本日の各地域での話も参考にして、他地域との連携・役割分担もうまく考えていきたい。その方が投資も少なくすむ。由良川を活かした地域振興も連携して考えていきたい。
- ・ 30代の職員を1人雇用した。インド留学や海外青年協力隊の経験がある人で、農大に3ヶ月間学びに来ていた。ここで生活したいが、働き場がなく暮らしていけないとのことだったので、大江観光(株)で雇用した。その職員が外国人観光客ともいろいろと話をしてくれて、受け入れをきちんとすれば外国の人も来るということが分かった。

その職員の関係で、ベルギー大使館ともつながったり、フランス人が実習に来て、ここに住みたい、という話も出てきている。日本人の中にも生活ができるのであれば大江に来たいという人は大勢いる。アンテナを張っていれば、来る人、やる人は国内外からやって来ると思っている。

→ もともと大江町の頃に、鬼のコンセプトでストーリーをつくって頑張って取り組んでおられたが、合併により行政と切り離されるとまわらなくなった。今、また大江観光が頑張っていて民間ベースで動くようになってきた。ある意味、一度盛り上がって萎んだよい事例。

ウィラー社等とも連携して取組を進めてほしい。現金収入がないと、持続可能性がないので、そのノウハウ、知識を身につけることが必要。舞鶴港には外国人が大勢来る。雪合戦のためだけでも訪れる人もいると聞いている。

■綾部市

- ・ 綾部市では農村都市交流に力を入れて取り組んできた。NPO法人里山ねっと・あやべに中心になって取り組んでもらってきており、その拠点为核心として、さらに交流人口拡大を図っていきたい。周辺には、京都丹州木材市場や京都木材加工センターもあるので、連携して取り組んでいきたい。
- ・ 綾部市は広いので、西部のみでなく、東部の山家駅を玄関としたエリアについても、綾部温泉等の資源もあるので連携して取り組みたい。東部・西部をうまく連携させることで、定住促進につなげていきたい。
- ・ 綾部はグンゼや大本教の発祥の地であり、平和やものづくりの気風など、現在の綾部を支えている背景があるので、こうしたものや自然を次世代に残すため、コンセプトを「将来を担う子どもたちをメインターゲットとした、森林や里山・農村の機能や可能性を学び実体験できる交流拠点づくり」として、事業を進めたい。
- ・ 具体的な事業については、里山ねっと・あやべの交流施設である体育館が豪雨災害で使用できなくなっており、それをどうしていくか等について、協議会で議論しているところ。

→ 綾部市には多くの自然がある。志賀郷の林道も迫力があり、山の魅力を感じた。綾部市は水源の里として売り出した地域でもあるので、市内の各地域のプレイヤーが互いに連携して取り組めるようにお願いしたい。

■京都市右京区京北

- ・ 京北の拠点づくりについてはまだ十分な内容がない。岡西副知事が来られた時に、「京北には良い資源がたくさんあるじゃないか」と言ってもらったが、それをちゃんとまとめられていないというのが課題。持ち帰り、スピードアップしてやっていきたい。
- ・ 11月2日には、非常に珍しい大会として「木こり技能大会」を合併記念の森で開催した。普段は山の奥で作業をするので、誰がどんなことをしているか分からないが、大会では、技術者が技能を披露し合うので、非常に刺激になったとのコメントが多かった。今でも技能がしっかりと伝承されている地域なので、そうしたことを見てもらえて、参加・体験できる場が設定できれば、1つの拠点になるのではないかと。運営費は、参加費+企業協賛で行った。こうした取組ができるのも、都を支えた森であったという歴史的背景と、自覚を持った後継者が少なからず存在するということが大きいのではないかと思う。

- ・ 森を守るには生物多様性が必要であり、どこかでチェックしないといけない。森を守ることがどういうことなのか、そういう視点でのアドバイスをこの構想にももらえればと考えている。

→ 木こり技能大会について、運営が参加費と企業協賛でまわっているのは持続可能性がありよい。

地域コンセプト等については、前回のワークショップで京北の良いもの探しをしたので、それを踏まえて引き続き検討していったらどうか。

(4) 意見交換 (※→は岡西副知事・本田企画理事のコメント)

<推進会議メンバー>

- ・ バスツアーは日帰り商品になるので、日帰りができる地域でないといけないが、これまでは、美山、京北、今年は亀岡でもツアー商品を企画した。

日帰りなので、昼食が重要になる。地元のこれ！というものがあるだけでも十分に商品になるので、そうしたあたりも念頭に置いて検討していただきたい。

→ 料理については、田舎だから安くするというのではなく、都会の人がびっくりするようなものを出してお金のとれるようなものを考えてほしい。

- ・ お話を聞いていて重要だと思ったのは、継続性とそのための収益性、つまり売れる商品をつくること。それは買ってもらえる状況をつくることでもある。買ってもらえるのは、知られていて、かつ、興味も持たれているから。ギャップ調査をすると、地元の人と消費者の認識にズレがあることがよくある。

消費者側からは、知らないが、何となく興味はある、というものが多い。誰のどういう思いに共感させるか、そのためには、どういう表現を使えばよいか重要。京北のワークショップに参画したが、地元の方だからこそその表現がいろいろと出てきた。

興味を行動につなげるためには、行動につなげるための情報、例えば、コストパフォーマンス、アクセス、1日で行けるかなどが揃っていることが必要。また、情報をどこで伝えるかも重要になる。京都縦貫自動車道が全線開通した時、その地域を目的にしていないと素通りされる。そうならないためには、例えば、帰りに寄ってもらうなら、丹後の旅館にパンフレット等を置いてもらうなどの工夫が必要。

- ・ 大きな情報に飲み込まれないようにしないといけない。遠くから来る人は大きな情報でよいが、30分くらいで来られるリピーターづくりも重要。
- ・ 台湾の原住民の地域での大会に参加してきたが、運営はNPOが行っている。NPOの力で継続的に守っていくこともできるのではないか。
- ・ 誰が受け入れ側になるか、ということについての1つの事例だが、神戸の「ちびっこうべ」では、受け入れ側もお客も子ども。神戸の子ども達とクリエイターと一緒に作りあげている。「森の京都」でも、子ども達が主人公になって、例えば雲原の猟師や京北の納豆づくりをする人といったクリエイターと一緒に数ヶ月間準備をして、一堂に集まれるような企画ができればよいと思う。「森の京都」のエリアには、鹿や猪をうまく料理する人、釣り名人、竹でザルや箸等をつくる人など、名人がたくさんいると思うので、それを学びに来る体験観光が実現できるとよい。

- ・ 本日の意見を聞き、例えば富山県が「森の富山」を企画したとしても、同じような企画が出るのではないかと感じた。大事なのは、京都らしい哲学を反映した多様性と独自色ある企画ではないか。

- ・ アイデアは遠いものを掛けあわせる方が新鮮、斬新となり、おもしろい。例えば、合気道と林業を組み合わせるなど。綾部には、晴れの日には山に行き、雨の日には仏像を彫っているおじいさんが複数いる。こうした人を府内で100人集め、「森と仏師」という切

り口で売り出すのも面白いのではないか。

→ 暮らしていくための経済効果を生む仕組みを模索しているところだが、どういう方向性でいけば、元気で暮らしていける地域になるか。

- ・ 昔は子どももフキを採り、夏の花火代にしたり、薬草を漢方屋さんに売って、里山ビジネスを当たり前にしていた。数年前まで綾部の志賀郷地区でおこなわれていた「手づくり市」では、村の子どもたちも、和紙などの素材や地域資源を活かし、作品をつくり、1回あたり5千円ほど売る子もいた。里山ビジネススクールなどの早期教育が必要であると感じており、来年度から始めたいと考えている。

<今西南丹広域振興局長>

- ・ 少し心配になったのは、森林・林業が輝いているからこそ地域が元気になるので、その議論がないといけないのではないかとということ。子ども達が誇りを持って、ということであれば、子ども達がもっと山に入れるようにしていかないといけない。地域振興施策とあわせて、循環型林業についても練り上げていくことが大切。

<金谷中丹広域振興局長>

- ・ 中丹管内では、3市を結ぶ100kmのサイクリングロードを整備しているところ。そうしたのも活用して、交流拠点のネットワーク化、由良川の活用、スポーツ観光振興等につなげたい。
- ・ 綾部の丹州木材市場で、昨年「京都丹州もくもくフェスタ」を開催している。昨年は広域振興局がかなり主体的な役割を果たしたが、今年は民中心で動くようになっている。
- ・ 舞鶴港にクルーズ船が入ってきている。オプションツアーでは、京都市内・天橋立等に行く人が多く、中丹地域に来る人は少ないが、もっと知ってもらって来てもらいたい。

<推進会議メンバー>

- ・ 各地域の取組に敬意を表したい。日吉ではなかなかそういう取組がまだできていない。
- ・ 生活を支えてきたものとしては、もちろん、林業、内水面漁業もあるが、農業もセットにしないとしんどいのではないかとというのが感想。
- ・ 「森の京都」というネーミングなので、森を適正に管理するということがまず根底にないといけないのではないかと。ささゆりは里山が適正に管理されていないと育たないが、今は山で見られなくなった。里山が荒れている。

- ・ 須知高校の「バンブービジネス事業計画書」を本日お配りしている。竹を粉にして、美山名水で缶にしている。来週試飲会が開催される。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの選手村に売り込みたいとのことなので、今後の発展に協力いただきたい。

- ・ 昔は景観がしっかりと形成されていたが、今はそれができなくなっている。景観形成は第3セクターでは無理であり、住民を巻き込んでいく必要があるが、経済的には一定の行政の支援が必要である。

→ 景観はどこを指しているのか。「海の京都」では町並みの修景の補助金をつくったが、私有財産について全額補助をするのは難しい。具体的な提案をいただければ一緒に考えたい。

森林ということであれば、防災の観点もあるので、森林税等にまで踏み込んでいくことも必要かもしれない。ただし、それはこの「森の京都」のエリアだけでなく、府全域で考えないといけないこと。それは、林業振興についても同様。

- ・ 京都市は景観政策が進んでおり、「看板条例」で随分綺麗になった。しかし、国際観光

都市京都というにはまだまだ不十分。道路のガードレール、標識、崩落防止の擁壁等、不必要な物が散乱して全体としての景観は醜悪。交通システム、道路建設は、必要不可欠なもののみを残し、撤去すれば景観は、良くなると思う。

例えば、信号機の要らない交差点システム（ラウンドアバウト）が、京都縦貫自動車道八木東インターと R477 が交差するところになった。非常に合理的で景観に良いだけでなく、省エネ、事故防止にも有効。京都の精神文化である簡素美は、こここそ活かされるべきだと思う。

4年程前、右京区区民会議で、木製のガードレールの導入を提案した。200人程の出席者の中、圧倒的賛同を得たが、建設局や警察の規制に阻まれ実現できなかったが、長野県等で設置されている。「森の京都」構想にぜひ採用してほしい。

→ 具体的な場所を教えてもらえれば、関係部局と調整する。

欧米等は自己責任の文化だが、日本では、事故等が起きるとすぐに行政の責任にする文化があるので、ガードレールや標識もどうしても景観よりも安全重視になってしまう。

- ・ 最近は、山に行くのも、事故があったら困るということで、子どもの時に山に入らずに、そのまま都会に出てしまう。学校教育の中で山に入れることも重要。

→ 要望を出してもらったら、教育委員会とも話をする。

- ・ 大学の林業専攻でも、実地で林業を教えていない。「海の京都」「森の京都」「お茶の京都」のエリアでは、関連の教育プログラムを学校教育に組み入れるべき。
- ・ 京都市内では、借景として山がある。木を切ったら、「うちの庭の借景なのに」と言って怒られたこともあった。この会議に京都市内の人を呼んで、そうしたことについても話を聞いてもよいのでもないか。

以上